錦城高校新聞

題字 井口 文章

再刊 第２４５号

印刷・発行

錦城高等学校新聞委員会
編集室 2017

みんなでつくる
錦城高校新聞

一面：文化プログラム取材第二弾
短期留学生の皆さん、日本へようこそ！
二面：みやぎ総文特集③ ～七ヶ浜町～
現地の人に聞く、復興に向けての想い

五輪へ向けた「文化混流」

東京五輪文化プログラム取材第２弾

９月９日(土)と10日(日)に八王子市で東京キャラバンin八王子が開催された。東京キャラバンは３年後の東京五輪へ向けた文化庁主催の文化プログラム(注)を先導する企画として、劇作家の野田秀樹さんらが平成27年に開始した。今回も編集部４名が共同通信社の記者と共に参加した。(編集室共同取材)

東京キャラバンin八王子では異なる地域・文化の交流、『文化混流』をテーマとして全国各地から訪れたアーティストが様々な踊りを披露した。取材した10日(日)は約３時間にわたってそれぞれパフォーマンスを鑑賞、参加者がレクチャーを受け、一緒に踊るという流れだった。

笑顔が印象的な天草拓心高校は江戸時代から続く天草の伝統舞踊「ハイヤ踊り」を、パラパラダンサーズは80年代に流行したダンス「パラパラ」を披露した。「琉球舞踊」などの伝統舞踊と、「パラパラ」など現代のダンスのコラボもあり、正反対と思われる２つの踊りでも来場者は楽しい雰囲気に合わせてノリノリで踊っていた。一角にはワークショップが設けられ、終日多くの親子で賑わい、自由に作ったお面や衣装を身に付けて踊る姿も見られた。

琉球舞踊「カチャーシー」のレクチャーを受け思い思いに踊る来場者

(注)２０２０東京五輪に向けた文化振興活動を。開催国では準備の４年間、様々な文化活動の推進がＩＯＣにより義務づけられている。そのことに基づいて開催されるイベントの総称を「文化プログラム」という。２１６号でも第１回のイベントを取り上げている。

２０２０年への期待

流れる音楽に合わせリズミカルに踊っていた井上みうさんと息子の友洋さんに話を聞いた。みうさんのダンスの師匠が近藤良平さんで高校生のときからダンスをやっていたということから今回のイベントに訪れた。

「こんな楽しいイベントが開かれていて良かった」と井上さん

友洋さんは車いすを使用しているため、バリアフリーのトイレが無いと２時間以上の外出ができない。「世の中のバリアフリーは全然進んでいないです。東京五輪の頃にはもっと整っていたら観に行きやすいな」と呟いていた。

自由に踊り、楽しめる

「パラパラ」の振り付けを担当した広崎うらんさんは「主催者の近藤さんと仕事仲間として長い付き合いで、呼ばれて出ることになりました」と話す。普段から様々なダンスの振付を行っているという広崎さん。「考えた振り付けをみんなが楽しく踊ってくれる、長年自分がやりたかったことが叶いました」と嬉しそう。このイベントの意義はどんなところか聞くと「みんなが好き勝手に楽しみ踊れる、そんな環境がこの東京キャラバンにはあると思います」と前向きに語る。

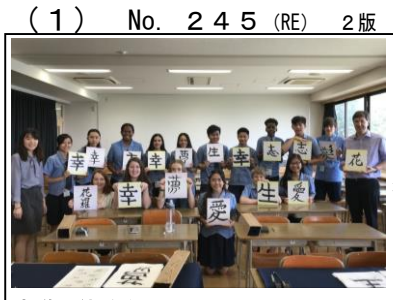
「ダンスの楽しさを伝えたい」と広崎さん

次回のキャラバンが熊本のため呼ばれた、「ハイヤ踊り」をした熊本県の天草拓心高校伝統芸能部。本番のために月曜から土曜まで毎日４時間近く練習をしてきた。部長の小川舞風さん(３年)に感想を聞くと「初めての県外での発表で緊張しましたが、良い機会になってよかったです」と安心した表情を見せる。伝統芸能の魅力は「見ているお客さんも元気になれること。やっぱりお客さんが喜んでくれるとやりがいを感じます」と小川さん。

今回、主催者・参加者問わずこのイベントを楽しんでいる様子がとても印象的だった。取材した委員は「最初は伝統的な踊りと、近代的な踊りは絶対に合わないと思っていた。でも実際に見てみると、どれも意外と合っていてとても驚いた」と話す。

東京キャラバンは誰でも参加することができ、10月９日(月)から12日(木)には熊本で開催されている。また全国各地で２０２０年に向けて様々なイベントが行われる。そのような活動に参加し、これからも錦城高校新聞で取り上げていきたい。

オーストラリアから錦城へ 日本の学校体験



書道の体験をしたフォレストレイク生

９月23日(土)～25日(月)の３日間、錦城にオーストラリアのフォレストレイク高校から15名がホームステイ、学校体験に来た。生徒は23、24日をホストファミリーと過ごし、25日には、書道やＯＣ、柔道などの授業に参加した。食堂で錦城生としゃべりながら昼食をとっていた４人に取材をした。

Chariotte Hindson さんは23日と24日にホストファミリーと新宿・原宿で買い物をしたという。好きなアニメ「ハイキュー!」のグッズを買ったり、クレープを食べたりしたそうだ。Tina Nguyen さんは将来、日本で語学を学びたいという。日本語を学びたいの？と聞くと「Any!(なんでも!)」と笑った。２人に錦城の生徒の様子を聞くと「静かだった。みんなちゃんと勉強しているから日本の学校の方がいいな」と口を揃える。錦城生に「みんなやさしい。ありがとう」とメッセージを送った。

「錦城生はまじめ」と語るティナさんとシャーロットさん

食堂前でホストファミリーたちとの昼食を楽しんでいたAlyssa Kotuhi さん。錦城生は元気で明るく、優しいイメージがあるそうだ。日本に来てからは京都と広島に訪れ、今後はディズニーランドに行きたい話す。向かい合って座っていたホストファミリーには「Thank you」とにこやかに伝えていた。

Marco Day くんは、オーストラリアと日本の生活習慣はとても違っていて興味深く感じたという。日本でいう中一の頃から日本語の勉強を始めたそうで、日本語が上手だ。取材中も英語で答えたあと日本語で言い直したり、会話の所々に日本語を交えてくれたりと、終始分かりやすいように話してくれた。

恒例の交通安全運動

旗を用いて歩行者を誘導する女子バレーボール部

９月２７日(水)の朝、女子バレーボール部員が錦城高校南交差点で、毎年春と秋恒例の交通安全運動を小平警察署や地域交通安全活動推進委員と共に行った。運動では、交通安全についての紙が入っているティッシュを配ったり、歩行者を誘導したりしていた。

地域交通安全活動推進委員会副会長の金子末夫さんと、同じく委員の五十嵐良夫さんに話を聞くと「この運動の目的は、自転車マナーの定着と、反射板を自転車につけてもらうこと。自転車関連の事故が減るよう呼び掛けていきたい」と話した。(蘭)

主催者が語るイベントへの想い

「五輪に向けて地域交流を」

それぞれ劇作家、振付家として活躍している野田秀樹さんと近藤良平さんに、今回のイベントについて話を聞いた。東京キャラバンの醍醐味は、新たな出会いが生まれることだ。地域で行われる行事が減りつつある今、このキャラバンから聞こえる音楽に引きつけられた地元の人や訪れた人に参加してもらうこと、それが狙いだという。

近藤さんは「様々な場所や時間で、文化同士が出会うチャンスを作っていきたい」と熱く語る。２人は「色々な人がそれぞれでしてきていることをつなげ、２０２０年に向けて文化的に盛り上げていきたい。そしてそれで終わらせずもっと先を見据えていきたい」と締めくくった。

是非参加してほしい

東京キャラバン主催スタッフの浅野五月さんに話を聞いた。浅野さんはアーツカウンシル東京という東京の魅力を広める団体に所属している。「みんな熱意を持って踊っていたと思う。参加者あっての文化プログラムなので、これからも続けていきたい」と次の活動に向けて語る。

「音楽や踊りで文化交流を」と野田さん(右)と近藤さん(左)

心に響く小平の音色

第32回ふれあいコンサート開催

９月23日(土)、ルネこだいらにて第32回ふれあいコンサートが行われた。本校吹奏楽部、小平第七小学校の吹奏楽部と和太鼓クラブ、小平第六中学校の吹奏楽部と箏曲部が出演した。

錦城の吹奏楽部は「斐伊川に流るるクシナダ姫の涙」、「テレビＣＭオンパレード」、「美女と野獣」の３曲を演奏した。「テレビＣＭオンパレード」は、誰もが一度は聞いたことがあるＣＭソング14曲のメドレーだ。ヨドバシカメラやチョコボール、ワークマンなどのＣＭソングで観客は大盛り上がり。ビックカメラのＣＭソングでは手拍子で会場が１つになった。

力強く太鼓を打ち鳴らす小平七小和太鼓クラブ

小平七小和太鼓クラブは「ぶち合わせ太鼓」を演奏。「ヨッ」という掛け声から始まり、力強く太鼓を打つ。曲の終わりには一つの太鼓を三人で交代しながら打つなど、小学生ながらも凛々しい姿を見せた。

小平六中箏曲部が演奏したのはＴＢＳこども音楽コンクールで優秀賞を受賞したという「龍星群」。６つのパートに分かれた28人の音色が綺麗に重なり合い、美しい旋律が会場に響き渡った。

６中の箏の演奏が印象に残っていると小平七小吹奏楽部の２人

再度、本校吹奏楽部が登場し披露したドリル演奏、嵐の「Happiness」では、部員たちが次々と隊形を変えていき、見事に揃った動きを見せた。最後にはコンサートに参加した３校の全団体が『となりのトトロ』の「さんぽ」を合奏し、会場は温かな雰囲気に包まれて幕を閉じた。

コンサート¥後、小平七小の和太鼓クラブで演奏した小学校６年生の娘を持つ杉山洋子さんに話を聞くと、去年来たときに素晴らしいと感じたそうで、今年も楽しみにしていたという。「錦城の演奏は、目をつぶるとまるで大人が演奏しているように感じます」と語った。(碧・

むらさき草

今年の夏休み、家族旅行で訪れた長崎の軍艦島ツアー。東京ドーム５個分の面積に廃墟と化した高層建築がひしめく姿が軍艦「土佐」に似ていることで有名だ。２年前に「明治日本の産業遺産」の一つとして世界遺産に登録されたこともあり、どんな風景が見られるかと楽しみにしていたが、その日は高潮で上陸は叶わなかった。代わりに隣の高島にある高島石炭資料館に立ち寄ると、軍艦島の模型近くで、ツアーガイドである元島民の坂本道徳さんは話し始めた。「外観ばかりが取り上げられるけど、この島がなぜ無人となったのかをきちんと理解してほしい。本当は興味本位でカメラを向けないでほしい」▼軍艦島の本来の名前は端島(はしま)。明治23（１８９０）年頃から海底炭鉱として良質な製鉄用原料炭を供給し、最盛期には５０００人もの住人が暮らしていた。しかし石炭から石油へとエネルギー政策が転換され、昭和48（１９７３）年に操業終了。全島民が島を後にして以来無人島となった▼坂本さんの説明は続く。「ここには人が住んでいた。観光客の方にはぜひそこをわかっていただきたい」。以前は廃墟としか見えなかったその島が、確かな歴史を刻んだものだと気付くことができた▼この夏、みやぎ総文で出会った『せんだい３．11メモリアル交流館』職員の奈良純さんも自分の故郷に対する思いを語ってくれた。「震災で大変な思いや悲しい思いをした人はたくさんいたけど、ここを『かわいそうな人たちが住んでいる地域』だとは思ってほしくない。訪れる人には普通に生活している普通の人の姿を見ながら、美味しい物でも食べて、この東北を見てほしいです」▼その土地にいる人の思いは、やはりそこに行かなければ知ることは出来ない。今号二面で取り上げている七ヶ浜でも「もっと訪れてほしい」という声がほとんどだった。これからも複雑な背景にあまり臆し過ぎず各地に足を運び、様々なことを感じていきたい。(湊)

みやぎ総文特集③「町を見に来てほしい」

☆七ヶ浜町の概要☆
位置；宮城県中央西部、太平洋に面している
人口；19,063人(H29.7.1現在)
面積；13.19km² (東北で一番小さい町)
日本三景松島が一望できる。栄養豊富な潮目をなす海で取れるウニやあわび、ぼっけが有名。鎌倉の七里ヶ浜と名前が似ていることから復興支援があり、今もイベントを開いて町と町で交流を続けている。

七ヶ浜はどこ？

町長が語る東日本震災当時とこれから

今取材の経緯・概要

８月１日(火)、みやぎ総文中の取材の一つとして宮城県七ヶ浜町を訪ね、東日本大震災の当時の状況や復興の現状などを取材した。今回の取材は、５年前に七ヶ浜町でボランティアをしたことがある委員の家族と現地の方の繋がりにより実現した。

始めに、七ヶ浜町長の寺澤薫さん、七ヶ浜役場総務課植杉淳一さんに七ヶ浜についてのお話を聞いた。その後、植杉さんに七ヶ浜町を案内していただき、震災復興に関わっている消防署などのいくつかの施設で、震災前後の話を聞くことができた。

また、15分で一周できるという町内を巡り町の景色や地元の料理などを味わった。

七ヶ浜と震災

七ヶ浜町では３９２９世帯が住家被害を受け(一部損壊も含む)、６１４３人が避難を余儀なくされた。

七ヶ浜町役場で町長の寺澤薫さんに話を伺った。６年前寺澤さんが七ヶ浜町職員を退職する時期が近づく頃、東日本大震災が発生した。「現場を見たとき、もう元には戻らないと思った。人生を全部否定されたような気分だった」という。それでも「地元に立つことをなにかしないと」という思いが湧き上がり、寺澤さんは震災から５年後、町長に就任した。

震災以前、町では地区を区切って訓練を行っていたそうだ。各地区で防災組織を立ち上げたほうが災害時に速やかな対応がとれる、という考えからだ。「対策もしていたし、準備はよくできていたと思う。とにかく高台に逃げるように呼びかけていたのでそれは良かった」と話す。しかし「震災の規模がもう桁外れだった」と続けた。当時の訓練で予想されていた津波の高さは、３，３ｍ。実際に起きた津波の高さは１２，１ｍだった。

課題は町民のつながり

各地域での支援物資の差にも不満が生まれたという。「震災直後は励まし、助け合いなどの連帯感が生まれた。しかし半年ほど経過すると生活環境に差が出て、連帯感が希薄になったと感じた」と寺澤さんは話す。「今、町の人のつながりが薄れたままになっている。若い人などは『津波が来るようなところに住みたくない』と言う。これらを解決していかないといけない。震災からの復興はこれからも続く」と語った。

七ヶ浜の全体図を指して説明する寺澤さん

高校生の活躍

「震災の時、高校生が頑張ってくれた。何かを言われたわけではないのに自ら支援物資や荷物を運んだり」と寺澤町長は振り返る。また、震災当時ちょうど高校入試の時期だった。避難所では10時頃に消灯していたが、受験生から「もうちょっと勉強したい」と要望があったので奥の隅を使って過ごしてもらった。するとその年、七ヶ浜の受験生の子達の合格率が今までにない良い結果だったという。「心から嬉しく思った。町のみんなも喜ぶ良いニュースだった」と寺澤さんは笑みをこぼした。

美しい七ヶ浜を再び

ずっとこの街で生まれ育ってきたという寺澤さん。「友達と一緒に海で一日中過ごすのが当たり前だった。海はとてもきれいだった」と当時を振り返る。「今、３月11日には追悼をしているが、その日だけで終わってほしくない。震災があったことを忘れずに覚えていてほしい。そして再び美しくなった七ヶ浜を見に来てほしい」と最後に強い思いを語った。

復興への変遷

津波で流された瓦礫で通行が困難になった

瓦礫で一面埋め尽くされた菖蒲田浜

道路が舗装され前より幅も広がった

町民が植樹運動を行い津波対策となっている

仮設住宅が解体されグラウンドに戻った

七ヶ浜町役場総務課 植杉淳一さん提供

瓦礫や塩分が取り除かれ田が蘇った

七ヶ浜 ひとの声

何ができるか連絡を

七ヶ浜町社会福祉協議会の事務局長である赤間長一さんに話を聞いた。協議会では炊き出しや他県のボランティアの受け入れなどをした。震災が発生した年のゴールデンウィークには多くのボランティアが集い、「ありがたかった」という赤間さん。しかし、事前連絡がない状態だったため、誰がどう動けるのかわからず、ボランティアをそれぞれの仕事に割り振るのに苦労したという。震災発生当初は瓦礫除去など、集団で行うボランティアが主だったが、現在は、単身高齢者の家庭を訪問して清掃や料理を手伝うといった活動が多いそうだ。

「情報がなく割り振りに苦労しました」と赤間さん

「これから被災地でボランティアをやりたいと思う中高生は事前に、自分が何をすることができるのかを考えてから応募して欲しい」と赤間さんは話した。

話し合いを日頃から

震災後、応急仮設住宅総合サポートセンター職員として活動していたＮＰＯ法人アクアゆめクラブの本田智子さんに取材した。震災時には仮設住宅での入居者への生活支援や健康状態の把握などを行った。

仮設住宅の資料を見せる本田さん

「仮設住宅では高齢者は動くことが極端に減ったことで体力が落ちち、子供たちは遊び場がなくなりストレスが溜まっていました」と本田さんは言う。そこでアクアゆめクラブは、高齢者向けに体操教室を開いたり、バスで蔵王や鎌倉の七里ヶ浜へ出かけるイベントを企画したりと、外に出るきっかけづくりをした。また、「仮設住宅のそばにベンチを置くことで、入居者同士が集まっておしゃべりができるようになりました」と町のコミュニティ作りも進められたそうだ。

本田さんは震災を踏まえ、「日常の中で当たり前の話題として、家族で災害時の話をしてほしい」と話した。

津波重視の訓練に

七ヶ浜消防署の署長菅野誠一さん、副署長小野秀一さんに震災当時やその後の変化について伺った。「訓練の仕方が震災前後でかなり変わりました」と菅野さん。震災前は建物が倒壊することを主に想定した訓練だったが、地震後は津波の到達を想定した訓練を重視しているそうだ。

写真で訓練の内容を説明する菅野さん

震災当時の吹雪や被災者の低体温症など、予想外の事態が多発したそうで「マニュアルがあってもやはり心配。自分は何をすべきなのか、指導していければと思っています」と語る。

小野さんは地震にあったとき車に乗っていて、何人かが階段を物凄い勢いで上がっていくのが見えたという。「これは津波が来るんだな」と思ったそうだ。その後小野さんは車から脱出し、自分の車が大きな波に流されていくのを見た。「そのときの階段を見る度に、思い出しますね」。

「津波など、実際に体験しないとわからないこともあります。体験した身として、恐ろしさを伝えていければ」と語った。

七ヶ浜の魅力

→日本で三番目、明治２１年に開設された菖蒲田海水浴場。今年の夏に再オープンしました

←七ヶ浜水産振興センターでは、ウニやなまこの養殖をしています

↑菖蒲田浜「とと家」でいただいたマグロの定食。グルメが豊富です！

夏は菖蒲田浜で海水浴！

↓松島四大観(松島湾の島々を一望できる名所)のひとつ。雄大さから「偉観」と呼ばれます

松島四大観 多聞山から臨む絶景

取材後記

今回の七ヶ浜町の案内は、町役場に勤める植杉淳一さんにしてもらった。町には、震災当時テレビでみた、がれきや倒木、破壊された建物はもうなかった。道路はきれいに整備され、新築の建物が多く建っていた。浜の、波を受け大きく傾いた松だけが、津波の威力を物語っていたが、もうほかには津波の跡はないように思われた▼しかし、復興は、町が整備されて終わるものではなかった。町の住民も、観光客も以前より少ない。また、町を巡るとだだっ広くなにもない空き地の多さを感じた。静かで穏やかな空間だったけれども、震災以前、建物も人ももっとたくさんいたのだと思うと少しさびしく思った▼松島四大観の多門山からの眺めは、心に安らぎをくれた。町のお店で食べた料理もおいしく、新鮮な野菜の漬物、ぷりぷりの刺身を味わった。養殖していたウニがちょっとずつ動いていくのがかわいかった。町の人々は優しく、取材中も快く話してくれた。どこへ行ってもすぐ近くに海があった▼七ヶ浜は町一周車で15分。小さいが魅力がたくさん詰まったところだ。「また行きたい」と強く思った。次に行くときの七ヶ浜はもっと魅力溢れるところになっているだろう▼東日本大震災以外にも災禍は今でも起きている。災害が起きた場所に抵抗があるかもしれない。でも実際に行ってみて、町は再生しようとしているのと同時に、新しく生まれ変わっていく、と感じた▼「復興は今でも続いている。皆さんには機会があれば被災地に是非足を運んでほしい」と植杉さんは言った。過去を受け入れ、強い想いを胸に、進んでいく強さがあった。